



こーひーぶれいく

可否茶館を想う

保田 浩志

Yasuda Hiroshi

本誌編集事務局から「こーひーぶれいくに寄稿を」との依頼メールをもらい、コーヒーを少し口にして、「さて何を書くかな」と考えた。こういうとき、手元にコーヒーがあると、頭の切替えがスムーズにできてありがたい。ここしばらくは、感染症の影響もあって、喫茶店でゆっくり過ごす機会を持ってないているが、そのうちまた、癒される音楽と美味しいコーヒーを味わいに出かけたいな。

さて、我が国で日本人による初めての喫茶店「可否茶館（かひさかん）」が上野に誕生したのは1888（明治21）年。その偉業を成したのは、当時30歳の鄭永慶（ていえいけい）だ。鄭は、欧米にあるような、一般の庶民や学生がコーヒーを飲みながら知識も学べるサロンとしてのコーヒーハウスを理想として可否茶館を設立した。2階建て木造洋館の1階にはビリヤードやクリケット、トランプ等をするエリアを設け、更衣室やシャワー室等を配備して、新聞・雑誌や美術書等を閲覧できる部屋も作った。喫茶室は2階にあり、コーヒーやパン、カステラ等を提供した。

鄭は、近松門左衛門の「国性爺合戦」で知られる鄭成功の家系につながる名家の出身で、父の鄭永寧は外務省権大書記官であった。恵まれた環境で学問に励んだ鄭は、14歳の頃には英語・フランス語・支那語（中国語）の3か国語を習得、16歳で渡米してニューヨークにあるエール大学に入り、エリートコースを歩み始める。しかし、病気のため中途退学を余儀なくされ、1879（明治12）年に学位取得を断念して帰国。回復した鄭は、翌（1880）年に岡山師範中学校（現在の岡山大学）に教頭として赴任、学生の教育に励む。ここで学僕として住み込んだ秋山定輔に会う。



「夕暮れどきのコーヒーハウス」 筆者 画

1882（明治15）年、惜しまれつつ教職を辞して東京に戻った鄭は、当時東京大学で経済学を講じていた田尻稻次郎の推薦で大蔵省に入省する。その翌年に結婚、長男をもうけるが、結婚から3年後に妻・寿子が肺の病で死去。役所での仕事が合わないと感じた鄭は、1887（明治20）年に大蔵省を辞職、不幸にも同年に鄭の家が火事で消失してしまう。失意から立ち直った鄭は、この焼け跡に西洋館を新築することを決め、翌年4月に可否茶館を開業する。

その後、可否茶館の出現が刺激となって、東京近辺に欧米スタイルの喫茶店が次々と誕生する。可否茶館は我が国の喫茶文化を変えた先駆的存在になった。しかし、経営状況は悪化を続け、困った鄭は相場に手を出して全財産を失ってしまう。米国へ行けば状況が好転するはずと考えた鄭は、秋山の助けを得て、横浜からシアトルへ密航する。が、米国でも暮らしは楽にならず、鄭は病気がちになり、渡米から1年ほど経った1895（明治28）年、シアトルで37年の波乱の生涯を終える。

後に秋山は、鄭の死についてこう語っている¹⁾。「死すべき人じゃないのが死んでしまった……が、人間の精神とか功德というものは、それと共に滅びるとは言えない……いわゆる輪廻となり、非常な幸福がそこに生まれてくることを、私は信じ、かつ信じている」。

秋山の死（1950年）から20年ほど過ぎた頃、鄭が没したシアトルの地にスターバックスという名のコーヒーハウスが誕生し、いまや世界を席卷している。鄭の夢が、時を超え、姿を変えて、実現したかのようだ。

参考文献

1) 星田宏司、日本最初の喫茶店『可否茶館』の歴史。いなほ書房（2008）

（広島大学原爆放射線医科学研究所）